

# Samson Agonistes と Antigone

森 道 子

*Samson Agonistes* はギリシア悲劇の形式に則って書かれたため、現存するギリシア悲劇詩人達、アイスキュロス、ソポクレス、エウリピデスの作品との比較、その影響が考察されてきた。そして最も類似する作品として、アイスキュロスの *Prometheus Bound* とソポクレスの *Oedipus Coloneus* とがあげられている。その理由は W. R. Parker や W. Brewer によって考えられてきたが、Parker も Douglas Bush も言っているように、たとえ細部に共通点がみられようとも、ミルトンがそれらを意識的に模倣したとすることは出来ない。ミルトンがギリシア悲劇を自らのものとして習熟していた結果生じたことである。

それにも拘らず、*Samson Agonistes* には特定のギリシア悲劇を想起させる箇所が多いのを否めない。ここではそのうちの一つであるソポクレスの *Antigone* との関連を考えたい。

暴君の定めた法令に背き、自然の法にかなった自らの本能的な決断で、兄を葬ったために死に赴くアンティゴネと、イスラエルの律法や周囲の人々の声に反しつつも (“Our Laws forbids at thir Rites / My Presence” (1320—21)), やはり本能的な “Some rousing motions in me” (1382) に導かれて敵という暴政に立ち向うサムソンには本質的な共通性がある。またそれこそ、ミルトン自らが早くから意識し、生涯を貫いた信念である。即ち Tyranny に挑み抗う孤高の闘士の姿である。*Samson Agonistes* のコーラスにも次の様に表現されている。

To quell the mighty of the Earth, th’oppressor,  
The brute and boist’rous force of violent men  
Hardy and industrious to support  
Tyrannic power, but raging to pursue  
The righteous and all such as honor Truth; (*S. A.*, 1272—76)

それは *Paradise Lost* のアブディエルにもうかがわれる烈しく雄々しい姿である。

Among the faithless, only hee;  
Among innumerable false, unmov’d,  
Unshak’n, unseduc’d, unterrifi’d  
His Loyalty he kept, his Love, his Zeal; (*P. L.*, V, 897—900)

### *Samson Agonistes* と *Antigone*

しかしながら両悲劇は構造的には大いに異なる。*Antigone*の主人公はアンティゴネからクレオンへと移り、劇の焦点が二分されるため、この作品自体の評価の汚点ともなっている。もちろん異論もあり、ギリシア悲劇の全作品のうちでも力強く優れた作品の一つであることは確実である。この点では *Samson Agonistes* の構成は統一されていて、*Prometheus Bound* と *Oedipus Coloneus* とに非常に近い。

構造上は異ろうとも、*Samson Agonistes* と *Antigone* の両作品を貫いているテーマには、*Prometheus Bound* や *Oedipus Coloneus* に見られない共通性がある。暴政に対する個人というテーマ、あるいは国家の法とそれに基く人間の判断と、人間を超える永遠の掟、神の法との相剋という主題である。そして天の掟、神の法を理解して、それを主張し、決然とそれに従う二人の主人公が、劇の結末で正しかったことを証明されるのであるが、それは同時に主人公自身をも亡すものであったという tragic irony である。この irony は *Prometheus Bound* にも *Oedipus Coloneus* にもみられないものである。さらに神の法を悟り難く、天の摂理に疎く、人間の立場でのみ判断する、双方のコーラスとサムソンの父マノア、アンティゴネの伯父クレオンの誤算にも共通点がある。クレオンの性格はマノアのより遥かに強く、劇で占める役割も重要であるが、クレオンもマノアもその愛する息子ハイモンとサムソンの死により、人間の理解を超える神の道、天の法を悟って、より高い知恵に達するのである。

サムソンの死は *Oedipus Coloneus* のオイディプスの死と類似するとされてきたが、静かに昇天するオイディプスと異り、過去の自己の罪の悔いに苛まれ、その結果の現在の激しい苦悶におしひしがれた後、自らを死にわたすサムソンの心の過程は、むしろアンティゴネの心の苦悶と自害に近い。二人ともその死により、神の考えは何処にあったかを、自覚しないまでも、コーラスやその他の人々に知らせるのである。しかし神に背いた自己の罪を悔い悩むサムソンがその死により再び神に嘉せられたことを証明する結末は、若く美しく汚れない乙女のまま、不当な咎をうけ苦しみつつ死んでゆくアンティゴネや度重なる天罰に茫然自失のクレオンの姿の暗澹たる結末とは大いに異なる。そしてそのちがいをこそ、*Samson Agonistes* とギリシア悲劇そのものとの違いである。テーマに共通点があり、細部に類似点がみられるにも拘らず、我々読者に及ぼす情緒的效果には大きな隔りがある。

サタンに孤り立ち向い、神の許に帰ってきた天使アブディエルは神に嘉せられる。

Servant of God, well done, well hast thou fought  
The better fight, who single hast maintain'd  
Against revolted multitudes the Cause  
Of Truth, ... (P. L., VI, 29—32)

これはそのままサムソンにも与えられるであろう神の言葉であるが、アンティゴネの神々はこうは言わないであろう。従ってこの二つの悲劇の最後に歌われるコーラスは歓喜と苦

*Samson Agonistes* と *Antigone*

痛ほども違う印象を残す。

His servants he with new acquist  
Of true experience from this great event  
With peace and consolation hath dismiss,  
And calm of mind, all passion spent. (S. A., 1755—58)

Chastisement for errors past  
Wisdom brings to age at last. (Antigone, 1352—53)

その違いは「人間とは！」と歌う両悲劇のコーラスの ode にも明白に表現されている。そこにはヘブライあるいはキリスト教的人間観とギリシア的人間観との特徴が表わられていて興味深い。この小論の主眼はその二つの choral odes を読み比べることにあるが、両劇の細かい共通点にまず目を通して置く。

第一に, prisoner として牢獄に閉じこめられるという設定が同一である。もっとも, 陽の当らぬ岩窟の牢獄に死刑の宣告をうけて幽閉されることを嘆き訴えるアンティゴネに対して, サムソンの牢獄は比喩的な面も強い。すでに捕囚の身であるサムソンの嘆きの種は, 神に背いた結果両眼を失い陽の目を見ることのできなぬ我が身という牢屋である。サムソンもアンティゴネも “living death” の苦痛を訴える。

As in the land darkness yet in light,  
To live a life half dead, a living death.  
And buried; but O yet more miserable!  
Myself my Sepulcher, a moving Grave,  
Buried, yet not exempt  
By privilege of death and burial  
From worst of other evils, pains and wrongs,  
But made hereby obnoxious more  
To all the miseries of life,  
Life in captivity  
Among inhuman foes. (S. A., 99—109)

O monstrous doom,  
Within a rock-built prison sepulchred,  
To fade and wither in a living tomb,  
An alien midst the living and the dead. (Antigone, 850—51)

次に, 目前の主人公の苦悶や運命や不幸に類似するものを過去の歴史や伝説のうちに探ることは, ギリシア悲劇のコーラスにしばしば用いられる手法であるが, この二作品にも登場する。*Samson Agonistes* では敵との闘いの際に加勢しなかった味方ユダヤ人達への憤懣を語るサムソンに, コーラスは味方の亡恩に会った Gideon と Jephtha の二勇士を想

*Samson Agonistes* と *Antigone*

い起す。いずれもサムソンと同様、士師記に登場する人物である。

Thy words to my remembrance bring  
How *Succoth* and the Fort of *Penuel*  
Thir great Deliverer contemn'd,  
The matchless *Gideon* in pursuit  
Of *Madian* and her vanquisht Kings:  
And how ingrateful *Ephraim*  
Had dealt with *Jephtha*, who by argument,  
Not worse than by his shield and spear  
Defended *Israel* from the *Ammonite*,  
Had not his prowess quell'd thir pride  
In that sore battle when so many died  
Without Reprieve adjudg'd to death,  
For want of well pronouncing *Shibboleth*. (S. A., 276—89)

続いて、後の人間に関する ode と深い関連をもつ ode に入っていく。*Paradise Lost* の主題でもある “Just are the ways of God / And justifiable to Men” (S. A., 293—94) という考えである。そして “Yet more there be who doubt his ways not just / As to his own edicts, found contradicting” (S. A., 300—301) の立場は、その後にくる ode (人間に関する ode) を貫いているものであり、二つの ode は同一の考えを全く逆の立場から歌っている。神に委せ、その善なる摂理に信頼しようというヘブライの神観に基いているにも拘らず、“As if they would confine th’interminable, / And tie him to his own prescript, / Who made our Laws to bind us, not himself” (S. A., 307—309) という言葉の奥には、神の道の測り知れぬこと、人間の惑う姿を読みとることができる。

一方、痛ましい嘆きと憤りの声を残して、牢へ曳かれていったアンティゴネを見送ったコーラスは、ダナエ、ドリュアスの息子、ピーネウスの二人の息子達という不当な扱いを受け牢に幽閉された者達をあげる。そのいずれもアンティゴネと同じく王族の出身である。しかもピーネウスの二人の子供達は継母に両眼を砕かれている。

Like to thee that maiden bright,  
    Danaë, in her brass-bound tower,  
Once exchanged the glad sunlight  
    For a cell, her bridal bower.  
And yet she sprang of royal line,  
    My child, like thine,  
    And nursed the seed  
    By her conceived  
Of Zeus descending in a golden shower.  
Strange are the ways of Fate, her power

*Samson Agonistes と Antigone*

Nor wealth, nor arms withstand, nor tower;  
Nor brass-prowed ships, that breast the sea  
From Fate can flee.

Thus Dryas' child, the rash Edonian King,  
For words of high disdain  
Did Bacchus to a rocky dungeon bring,  
To cool the madness of a fevered brain.  
His frenzy passed,  
He learnt at last  
'Twas madness gibes against a god to fling,  
For once he fain had quenched the Maenad's fire;  
And of the tuneful Nine provoked the ire.  
By the Iron Rocks that guard the double main,  
On Bosphorus' lone strand,  
Where stretcheth Salmydessus' plain  
In the wild Thracian land,  
There on his borders Ares witnessèd  
The vengeance by a jealous step-dame ta'en,  
The gore that trickled from a spindle red,  
The sightless orbits of her step-sons twain, (*Antigone*, 944—76)

ソポクレスのコーラスは “dreadful is the mysterious power of fate ; there is no deliverance from it by wealth or by war” と結論する。この考えは *Antigone* の人間讃歌の ode と密接につながっている。人間は数々の能力に恵まれ、万物を治めているがそれにも拘らず、「ただひとつ求めえないのは死をのがれる道」 (“for death he hath found no cure”) で、いかに優れた力をもっておろうとも、死とそれを司る運命には屈しなければならない。その神はサムソンの神より一層遠い存在で、不気味でさえある。

第三に、ハラファの侮辱に決闘を挑み、ダゴンとイスラエルの唯一神とのいずれが真なるかを決しようと叫ぶサムソンの語調の烈しさは、クレオンの前に曳き出されたアンティゴネの調子と同様である。彼女は神々の法はクレオンの法令など及びもつかぬ絶対的なものだと述べる。

For proof hereof if *Dagon* be thy god,  
Go to his Temple, invoke his aid  
With solemnest devotion, spread before him  
How highly it concerns his glory now  
To frustrate and dissolve these Magic spells,  
Which I to be the power of *Israel's* God  
Avow, and challenge *Dagon* to the test,

*Samson Agonistes と Antigone*

Offering to combat thee his Champion bold,  
With th'utmost of his Godhead seconded:  
Then thou shalt see, or rather to thy sorrow  
Soon feel whose God is strongest, thine or mine. (*S. A.*, 1145—55)

Yea, for these laws were not ordained of Zeus,  
And she who sits enthroned with gods below,  
Justice, enacted not these human laws.  
Nor did I deem that thou, a mortal man,  
Could'st by a breath annul and override  
The immutable unwritten laws of Heaven.  
They were not born to-day nor yesterday;  
They die not; and none knoweth whence they sprang.  
I was not like, who feared no mortal's frown,  
To disobey these laws and so provoke  
The wrath of Heaven. (*Antigone*, 450—60)

続いて、辛い心を吐露するアンティゴネは聴く者の心を揺り動かさずにはおかないが、ハラファを退散させた後のサムソンも同じ心を告白する。

if death  
Is thereby hastened, I shall count it gain.  
For death is gain to him whose life, like mine,  
Is full of misery. (*Antigone*, 461—66)

But come what will, my deadliest foe will prove  
My speedist friend, by death to rid me hence,  
The worst that he can give, to me the best. (*S. A.*, 1262—64)

これは以前 prisoner として living death を訴えた二人の当然の心情である。

第四に、終末近く、コーラスがサムソンの不滅の徳を不死鳥に喩えて讃える有名な simile がある。コーラスはその直前でサムソンを dragon が家禽を襲う様と、鷲が舞い下りる姿とに喩えている。

And as an ev'ning Dragon came,  
Assailant on the perched roosts,  
And nests in order rang'd  
Of tame villatic Fowl; but as an Eagle  
His cloudless thunder bolted on thir heads. (*S. A.*, 1692—96)

この dragon とは実は蛇である。しかしわざわざ dragon という語を選んで用いている。*Antigone* では、プロローグの直後、コーラスはテーベに攻め寄せてきたポリュネイケスとその麾下のアルゴスの軍勢を鷲に、迎え討つテーベの軍勢を dragon に喩えている。白

*Samson Agonistes* と *Antigone*

い小鳥を狙って低く舞い下る鷲のイメージは *Samson Agonistes* のと同じものである。

Like to an eagle swooping low,  
On pinions white as new fall'n snow, ... (*Antigone*, 113—14)

they turn  
Forced by the Dragon; (*Antigone*, 121—22)

最後に海に関するイメージが *Samson Agonistes* 全篇を貫いているが、同時にそのイメージは *Antigone* 全体をも支配している。 *The Poems of John Milton* (Longman 版, Carey & Fowler 編) の *Samson Agonistes* への序説には、次の様な説明がある。(pp. 339—40)

*Samson Agonistes* において海の力は初め、敵ペリシテ人の側にある。サムソンはプロローグの初めでダゴンを “Sea-Idol” と呼ぶ。有名なダリラに関する ship-simile を蝶番として、敵側の海の力はサムソンに移り、自らをも敵をも破壊する力となる。いずれにしても自他を亡す力である。サムソンは自らの過去の誤ちを喩えて、 “who like a foolish Pilot have shipwreck't / My Vessel trusted to me from above, / Gloriously rigg'd” (*S. A.*, 198—200) という。しかしそれはダリラの様な舵手を伴っていたからだとコーラスは指摘する。 “What Pilot so expert but needs must wreck / Embark'd with such a Steers-mate at the Helm?” (*S. A.*, 1044—45) ダリラは立ち去る前に、自分に耳を傾けぬ無情なサムソンを風と海とに喩える。 “more deaf / To prayers, than winds and seas, Yet winds to seas / Are reconcil'd at length, and Sea to Shore” (*S. A.*, 960—62)

*Antigone* では海の比喻、イメージは常にクレオンにつきまとう。同じく自他を破壊する力である。初めて登場する時、クレオンは自らが統治し始めた町テーベを船に喩える。 “the state is the good ship that holds our fortunes all” (188) テーベが戦いに勝ち落着いた様子を “our storm-tossed ship of state now safe in port” (164) と表現する。クレオンが定めた法に逆い、その裁きをうけるアンティゴネを妹イスメーネは “thy bark is stranded” と表現する。愛する婚約者アンティゴネの処刑を知ったクレオンの息子ハイモンは、他人の知恵に耳を貸さず、自らに固執して頑固な父を、誤った処置をとる水夫に喩える。

The mariner who keeps his mainsheet taut,  
And will not slacken in the gale, is like  
To sail with thwarts reversed, keel uppermost. (*Antigone*, 715—17)

こうしてクレオンという誤った判断を下す水先案内人により、アンティゴネ、ハイモンという小舟は難破し、テーベという船も誤った針路を辿ることになり、クレオン自身もとり

返しのつかぬ大被害をこうむることになる。

次に *Samson Agonistes* における人間に関する ode と *Antigone* における人間讃歌として有名な ode とを比較して考えたい。*Antigone* の ode ほど人間に関して正面きって歌っているものは、残存するギリシア悲劇作品のうちでは他に類がない。プロメテウスの独白をあげる人も多いが、立場が異なる。従ってミルトンが自らの悲劇で「人間とは何か」とコーラスに問わせる時、*Antigone* のコーラスを全く考慮に入れていなかったとは考えられない。もちろん内容上は「ヨブ記」や「詩篇」の“what is man”と問う箇所への反映が大きい。形式上構成上は、ギリシア悲劇に倣っている。しかし両者の思想内容には本質的な違いがある。ギリシア人の人間讃歌と、旧約聖書の「ヨブ記」「詩篇」や新約聖書の「ヘブライ人への書簡」を背景にもつ人間観にはおのずから大きな隔りがある。それは異教の文学形態でヘブライやキリスト教のテーマを扱うミルトンの意識的なものであると思われる。ギリシア人は人間とは“wonder of wonders”, “strange”, “terrible”, “mighty”であるとし、ヘブライ人は人間に対する神の業、道が“full of wonders”, “wonderful”, “terrible”, “mighty”であるという。即ち、*Antigone* の ode が人間讃歌であれば、*Samson Agonistes* のは神への讃歌である「詩篇」「ヨブ記」を根拠としている。しかし、*Samson Agonistes* に影響を与えている詩篇の部分は *Antigone* のコーラスと実によく似ている。神は人間に多大な栄光と誉れ、能力を与え、大地とそこに住むもの、空と鳥、海とそこに住む魚を治めさせ、海を行く法も教えて下さった。神の代理としてこの世の被造物を支配する権利を与えて下さった、と。

*Antigone* のコーラスは同様のことを人間の立場でのみ把えて、そのような人間を“marvellous”と讃えるのであるが、詩篇作家は人間をそのように高めたまう神こそ“marvellous”と神を称める。*Antigone* の ode on Man はその悲劇の第二番目の ode であるが、*Samson Agonistes* のは第三番目のものである。第二番目の ode は“Just are the ways of God”で始まる対照的な、神に関する ode である。

ところが、人間の讃美に終始するが如き、*Antigone* の ode に“yet for death he hath found no cure”という一点の影がさしている。それは短く、とるに足らぬようであるが次に続く ode によって、その影は次第に大きく拡がっていく。その影に反比例して、人間の強さ、能力は小さく弱くなっていく。そしてこれほど優れた能力に満ちた人間も、測り知れぬ力と知恵をもつ神々、運命、死の前では、いかに無力であり、惨めな存在であるかということが、劇の進行に伴って、我々に強く訴えかける。それ故に一層、人間の讃歌は、空虚にまた哀れにひびくのである。

これに反し、*Samson Agonistes* のコーラスが神に向って、人間への不可思議な態度、千差万別な計画をいかにかこち、人間への不当に思える罰と苦しみをいかに嘆きつぶやこうとも、その背後にある「詩篇」や「ヨブ記」を想い、我々は希望と信頼を棄てることはな



*Samson Agonistes* と *Antigone*

い。そしてその希望と信頼とは、その前後の ode によって確固とされ、劇の末尾の “All is best, though we oft doubt, / What th’unsearchable dispose / Of highest wisdom brings about, / And ever best found in the close.” で最高潮に達する。その人間に関する ode の前の第二番目の ode で「神の道は義しい」と確信に満ちた言葉をきいている我々は、サムソンの苦痛も嘆きも、必ず癒されることを疑わないのである。また第四番目の ode においても、地上の压制者、暴君を打ち倒す救助者を神は遣わされるということが、信頼に満ちた言葉で語られる。このように人間に関する ode の前後の二つの ode は人間に関する ode の考えを打ち消す方向にある。さらに人間の側の心の態度である忍耐を勧めて、神のいかなる態度にも信頼を失わず、逆境を克服していく人間の姿を描いている。それはこの ode の背後にある、ヨブや詩篇作者やパウロの姿であって、ヘブライの義人からキリスト教の聖人へと伝わっていった人間像であり、ギリシア悲劇の人間像とは異なるものである。悲劇に備えて予め心の覚悟のできている人間と、悲劇をまともにかぶって喘ぎ苦しみ、その経験により諦念に近い知恵に到達する者との違いである。言いかえると、*Samson Agonistes* の ode on Man はその悲劇の中の最も暗い面を表現し、*Antigone* のは最も明かるい面を表わしている。従って愛する息子を失うという同じ悲しみのうちでも、マノアとクレオンの受けとめ方は異なる。

Nothing is here for tears, nothing to wail  
Or knock the breast, no weakness, no contempt,  
Dispraise, or blame, nothing but well and fair,  
And what may quiet us in a death so noble. (S. A., 1721–24)

By sorrow schooled. Heavy the hand of God,  
Thorny and rough the paths my feet have trod,  
Humbled my pride, my pleasure turned to pain;  
Poor mortals, how we labour all in vain! (*Antigone*, 1271–76)

二つの ode on Man はその内容は異なるが、それぞれの立場、即ちヘブライとギリシアの立場から、固有の人間観の本質を歌いあげているという点で、同じ役割を果たしているといえよう。また両 ode は両悲劇の結末を暗示する irony を含んでいる点でも立場を等しくしている。「罰と苦悩のうちにある、かつての神の闘士を平和のうちに休ませ給え」と祈る *Samson Agonistes* のコーラスと、「これほどの人間も死だけは免れえない。ポリスの法と神々の正義を尊重しないものは呪われよ」と願う *Antigone* のコーラスとは、自らの言葉に託している意味、即ち、文字通りの意味とは異った別の意味を含んでいる。それをコーラス自身は理解していないが、両悲劇はその別の意味の成就をみることになる。コーラスの考えや願いとは異なる悲劇的結末である。労働から解放され、平和な余生を送らせてやりたいと願う *Samson Agonistes* のコーラスの祈りは、死という永遠の平和、休息、

*Samson Agonistes* と *Antigone*

終末となって実現し、クレオンの命令を神の法にかなうものと考え、それに背いてポリュネイケスを葬る者に災いを願う *Antigone* のコーラスは、神の正義に反していた者とは、実はクレオンその人であったことを知るのである。

ここで我々は「人間とは」と問う悲劇の主人公をもう一人思い起すことができる。

What a piece of work is a man! How noble in reason! How infinite in faculty, in form and moving! How express and admirable in action! How like an angel in apprehension!  
How like a god! The beauty of the world! The paragon of animals! And yet, to me, what is this quintessence of dust? (*Hamlet*, II, ii, 315—20)

この言葉はギリシアのコーラスにより近い人間讃歌のようでありながら、同時にキリスト教的思想を備えている。即ちルネサンスのイギリスの人間観の代表であり、“great chain of being”のうちにある人間である。*Antigone* のギリシア的人間観とも *Samson Agonistes* のヘブライの人間観とも異っている。

A. S. P. Woodhouse がサムソンとハムレットを比較して、“They are on the side of the power—the overruling power—which destroys them. Irony is of the very substance.”<sup>(1)</sup> という時、それはそのままアンティゴネにもあてはまる。続いて“A common feature in all tragedies is a sense of disaster”<sup>(2)</sup> と述べ、二人の主人公の死後、*Hamlet* に一層その感が残ると指摘しているが、これもまた *Antigone* についても言えることである。そして父の霊を鎮めるために正義を満たすハムレットと、兄の亡骸を葬ることで正義を満たすアンティゴネの悲劇的かつアイロニカルな死は同じ悲劇的効果を我々に与える。サムソンの勝利の凱旋ともいべき死はキリスト自身の死に近く、不死鳥の simile はサムソンの名声の不滅性を象徴するものではあるが、復活の約束を暗示するとさえ思われる。それにひきかえ、アンティゴネの死にもハムレットの死にも慰めや安堵感は少く、“well done” とねぎらう神の声も、歓呼とホザンナを叫ぶ天使達の声もきこえない。

最後に、*Samson Agonistes* の ode on Man にある“thir carcasses / To dog' and fowls a prey”について一言つけ加えておく。ここにミルトンの *Antigone* に対する意識、allusion 読みとることができると思う。“A corpse for birds and dogs to eat”は *Antigone* の中で言葉をかえつつ数度登場する。この悲劇の源泉たるものであり、これなくしては、*Antigone* という悲劇は成立しなかったであろう。Hughes, Fowler, Verity, Percival 等 *Samson Agonistes* の編註者達は *Iliad*, I, 4 の影響を述べている。しかし *Iliad*, *Odysseia*, *Aeneid* に倣って叙事詩 *Paradise Lost* を制作したミルトンが、ギリシア悲劇に則った作品を作るに際し、ギリシア悲劇よりも叙事詩に言及したと考えるのは不自然である。それをめぐると一つの悲劇の存在をミルトンが見逃すとは考えられないのである。

*Samson Agonistes* と *Antigone*

注

- (1) A.S.P. Woodhouse. 'Tragic Effect in *Samson Agonistes*', *Milton: Modern Essays in Criticism*, ed. by E. Barker, Oxford, 1970, p. 462.
- (2) *Ibid.*, p. 457

引用文は次のものによる。

*John Milton: Complete Poems and Major Prose*, ed. by Meritt Hughes (Odyssey, 1957)

*Sophocles I*, tr. by F. Storr (Loeb Classical Library) Heinemann, 1962

*Shakespeare: Complete Plays and Poems*, New Cambridge Edition (Houghton Mifflin Company, 1942)